

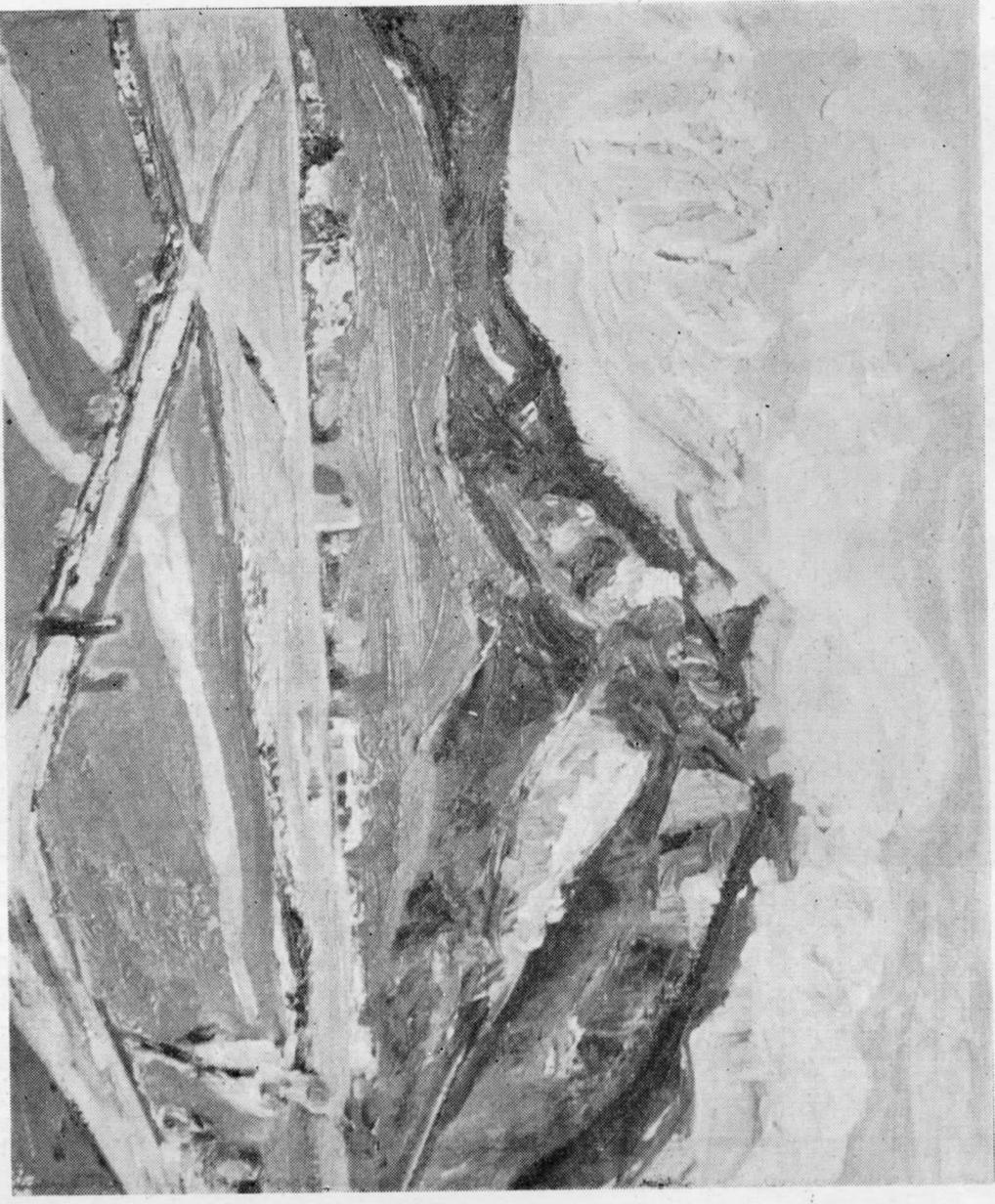
毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

# 山と博物館

第7巻 第10号

1962年10月25日



秋の大町風景

画 太田 忠 雄

大町山岳博物館

## 北アルプス、特に後立山連峰を中心とした 飲料水水質検査について

大町保健所長 古原和美

登山ブームといわれる程の最近における登山者の激増に伴い、山岳観光地域の環境衛生、食品衛生等の諸問題も又、一般観光地におけると同様にゆるがせに出来ない重大な段階にきていると言えよう。中部山岳国立公園の大半を管内にもつ当所では、この数年来、北アルプス北部の山小屋、主要登山コースを中心として種々衛生面における調査、指導を行っているが、その一環として、山小屋及び登山コース中の水飲み場の飲料水検査も合せ行っている



沢の水を汲む登山者

ので、今までの結果を発表して参考と共にしたい。  
検査は登山者の最も雑とうする7、8月を選び、所員が滅菌した採水びんを持参して、直接現場において無菌的に採水を行った。

調査箇所、水源の種類は表に示した通りで、検査項目については、厚生省の一般飲料水検査指針に従い、外観異臭、異味、PH、アンモニア性窒素、亜硝酸性窒素、硝酸性窒素、過マンガン酸カリ消費量、塩素イオン総硬度(以上、物理化学的検査)大腸菌群検査(生物学的検査)を行ったが、物理化学的諸検査においては殆んど異状を認められなかったため、その結果については詳略する。問題になったのは大腸菌群検査で、この結果については表に示した如くである。即ち、大腸菌群検出率は昭和35年度では、検査箇所16箇所中、陽性10箇所(62.5%)昭和36年では検査箇所29箇所中、陽性14箇所(48.3%)昭和37年では検査箇所32箇所中、陽性13箇所(40.6%)で、一見すれば年々大腸菌群検出率が減っているようにおもわれるが、その内容について個々に検討してみると、必しも単純に減少しているのではなく、昨年まで陰性であった場所でも、本年は陽性となったりして、検査箇所の殆んど大部分が此の3年間の検査で少なくとも1回以上は大腸菌陽性と云う結果を得ている。この結果からして、北アルプス北部一帯の水はかなり広範囲にわたって大腸菌群によって汚染の度は年々激しくなっていく傾向がうかがえる。

大腸菌群による飲料水汚染の最も大きな原因は当然激増した登山者に帰せられるだろう。もともと大腸菌は人

気の無い処には殆んど存在しない(山での例外としては獣糞、或は土壌中にもたまたま大腸菌を発見する事があるがこれ等の菌型は人間のものと若干異っている。)

即ち、登山者が増えるに従って、人体から排出される糞尿、その他の汚物を通じて大腸菌は水に移行し、飲料水が汚染される危険が増大するわけである。

飲料水中に大腸菌が検出される事は、大腸菌そのものは病原性がなくとも、他の病原菌たとえば、赤痢菌、腸チフス菌等の恐ろしい急性伝染病病原菌も共存する可能性を示している。山岳観光地域で、我々が最も恐れているものは、この伝染病の爆発的流行である。飲料水中の大腸菌検出が、そのまま伝染病の発生に道を通している事を銘記して頂きたい。

以上の事からして、今後の対策として、

1、登山者自体の社会道徳の高揚(糞尿をみだりにしない事、汚物を勝手に捨てない事、人為的に水をよごさない事、生水を飲みぬ事等)

2、山小屋等の施設においては、飲料水、使用水を必ず滅菌消毒する事、(此の事については既に昨年度より各小屋に飲料水、使用水のタンクを設置させ、点滴滅菌消毒装置によって、常時滅菌消毒を実施するよう指導して、数年のうちに全山小屋に完成する予定である。)

3、雪渓その他コース中の水飲み場等においては、地形位置を考慮し、汚水流入のおそれあるものには、営林署等関係機関とはかって飲用禁止の表示をする。等の処置をとる事が妥当であると考え。

## 大腸菌群検査結果表

施設名	水源種別	昭和35年		昭和36年		昭和37年	
		7月	8月	7月	8月	7月	8月
猿倉小屋	湧水	(-)	(-)	(-)	(+)	-	
白馬尻小屋	"	(+)	(+)	(+)	(-)	(+)	
頂上ホテル	"	(+)	(+)	(+)	(-)	(-)	
白馬山荘	"	(-)	(+)	(-)	(-)	(-)	
大池小屋	雪溪融解水	(+)	-	(-)	-	(+)	
梅池小屋	湧水	-	-	-	-	(+)	
天狗山荘	雪溪融解水	-	-	(-)	(-)	-	
白馬ヤリ温泉	湧水	-	(+)	-	(+)	-	
唐松小屋	雪溪融解水	(+)	-	(-)	(+)	-	
黒菱小屋	湧水	-	-	(-)	(+)	-	
八方山荘	"	-	-	(-)	(-)	-	
五竜小屋	"	(-)	-	(+)	(-)	-	
キレット小屋	雪溪融解水及び天水	(+)	-	-	(+)	-	
遠見小屋	湧水	-	-	(+)	-	-	
冷小屋	"	(+)	-	(-)	(-)	-	
種池小屋	雪溪融解水及び天水	(-)	-	(-)	(-)	-	
針ノ木小屋	"	-	-	(+)	(-)	-	
大沢小屋	雪溪融解水	(-)	-	(+)	(+)	-	
船窪小屋	湧水	-	-	-	(-)	-	
湯俣山荘	"	(+)	-	(-)	-	(+)	
晴嵐荘	"	(+)	-	(-)	-	(-)	
濁小屋	"	-	-	(-)	-	(-)	
烏帽子小屋	雪溪融解水及び天水	-	-	(-)	-	(-)	
三俣山荘	"及び湧水	-	-	(+)	-	(-)	
餓鬼山荘	天水	(-)	-	(-)	-	-	
大雪溪下端	雪溪融解水	-	-	(+)	-	(+)	
大雪溪上端	"	-	-	(+)	-	(+)	
小雪溪上部	"	-	-	(+)	-	-	
小雪溪末端	"	(+)	-	-	-	-	
大雪溪中央部 (1)	"	-	-	-	-	(-)	
大雪溪中央部 (2)	"	-	-	-	-	(-)	
頂上東側雪溪	"	(+)	-	-	-	-	
針ノ木雪溪中央部	"	-	-	-	(+)	-	
針ノ木雪溪下端	"	-	-	-	(-)	-	
陽性個所 検査個所 (%)		$\frac{10}{16}$ (62.5%)		$\frac{14}{29}$ (48.6%)		$\frac{13}{32}$ (40.6%)	

# 秋の夜空

森 義 直

秋もようやく深まり空が澄んで夜が日増しに長くなると天文ファンにとって喜びのシーズンとなる。太陽は乙女座から天秤座へ進みペガサスの大正方形やアンドロメダ座が頭上を飾るのに反し銀河が西に寄ってしまい、いささか寂しく感ずる。こゝで手もとにある星図を便りに秋の星空を探ってみる事にする。

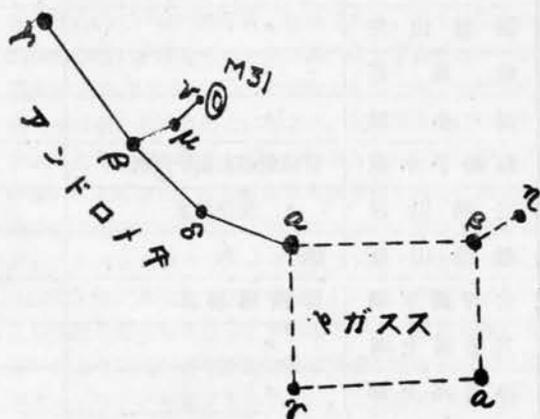
用意するもの1、星図か星座早見 2、暗くなった電池(明るいものには赤いセロハン紙で覆う) 3、双眼鏡か小望遠鏡、よく防寒具を身に付けて兎に角庭に出る始めて星座を覚えようとする人は、まだ十分に暗くならない中に出て1等星や2等星しか見えないうちに主な星座を知る事が大切である、暗くなってしまうと余りにも星が多く見えて見当がつかなくなってしまう。見方は先づ星図の北極と空の北極星とを合わせて、その附近の星座を覚える。次に天頂附近、次に南そして東、西、と云うように星図の方位と空の方位のはっきりしたものから探して行けば覚え易い。ただ小さい星図を使うと空が広過ぎて戸惑う事もあるから注意する。

大町附近の秋空の冴方は物凄く7等さえも肉眼で認められる程である。双眼鏡でも使うと楽しい空の散歩が出来る。そこで秋に是非見ておきたいものを上げると、星雲では肉眼で見る唯一の別の宇宙でM31と呼ばれ我々から約175万光年の距離にあるアンドロメダ星雲である。別の図を参考にして探すと簡単に見つけられる。双眼鏡又は小望遠鏡では微ぼろとした雲状に見える。次に星団ではペルセウス座にある二重星団が特に美しい、カシオペアのWとペルセウス座の中間で銀河の中にあり肉眼でも位置はわかるが双眼鏡では中心が二重になっている星のかたまりである事がはっきりわかり、キラキラ輝いて実に美しい。距離は8,200光年である。その外の散開星団では有名な牡牛座のプレアデス星団である。普通人に肉眼で6つ、目の良い人は8つも9つも見えるようであるから一つ試して見たら面白いと思う。和名スバルとか六つ星とか云っており11月頃東天に見えるので誰でも知っている。星数は400位で距離は500光年である。双眼鏡では50近くの星が寄り集っていて美しいが15cm以上の望遠鏡で見ると明かかい星の回りが燐光を放ったように輝いて何とも云えない美しさである。これは星団全体がガス星雲に包まれている為で長時間の露出で撮った写真では奇麗な散光星雲が見られる。又同じ牡牛座にあるヒヤデス星団は小望遠鏡で良く見えるプレアデス程ではない。二重星も小望遠鏡で見えるものが幾つかあるが中でもアンドロメダ座ガンマー星は2,3等の黄色い星と5,1等の青色の色とからなり5cm位の望遠鏡で見ると非常に

美しい対である。白鳥座ベーター星(白鳥の頭)は双眼鏡や3cm位の望遠鏡で美しく見える。重星が黄色い等星と青い5等星とからなっている。西の山に沈まないうちに是非一見に値する星である。其の他オリオン座の入星は薄黄の4等星と紫色の6星からなり小望遠鏡で美しい。

双眼鏡や望遠鏡のテストに良く二重星が使われるがこれは性能の悪いレンズだと2星に分解出来ないか又は彗星のように星が尾を引いて見えるからである。風影の良く見えるものでも星が点にならず案外流れてしまうものが多い。次に1等の中で此の季節に見えるものは南魚座のフォーマルハウトが南天に白色に輝き西天には低く琴座のヴェガと鷲座のアルタイルと、そして白鳥座のデネブが白色に輝いている。東天には牡牛座のアルデバランが橙色に輝くが秋も遅くなると双子座のカストルが白色の光を放ち、青白色に輝くオリオン座のリゲルが顔を出して冬を告げる。

惑星や月もファンにとってには仲々興味があるが大きな望遠鏡がなくて手が出ないなどと云わずに小望遠鏡に向けて見ると案外良く見えるのに驚く、金星は日没後西天低く輝いているが3cm位の望遠鏡でも実にはっきり三日月形が見えるし7~8倍位の双眼鏡でも動かないように、



## アンドロメダ大星雲の探し方

先ずペガサスの平行四辺形を探し、次にアンドロメダ座のアルファ、ベーター、ガンマー、とたどりベーター星からシグマ星、V星と見て行くとV星の先の所にポーとした光を発見する事が出来る。

固定すれば小さな三日月形に見え11月にかけて次第にかけて次第に細く欠けて行く様子を見る事が出来て楽しいものだ。15cm~20cm位の望遠鏡で昼間見るとシーイング

時の良いには薄く模様に見える事もある。火星はまだ近くて駄目であるがカニ座にあって次第に近づいており今月(10月)の24日にはプレセペ星団の中を通過するので大望遠鏡の所有者には面白い眺めとなる。一番面白いのは何と云っても木星で双眼鏡でも有名なガリレオの発見した4箇の衛星が木星の陰にかくれたり現われたりして変化するさまがはっきりとわかる。

2~3時間おきに見ると大部位位置が変わって見える。木星本体の模様は3~5cmの望遠鏡に50倍位使うと2本位帯が見える。15cm以上の望遠鏡で200倍以上の倍率を使うと帯の細かい構造や自転がわかり有名な大赤点が見え衛星が本体の上を横切る時には光った丸い衛星が真黒い影を落して進んで行くのがはっきり見える。次に環のある事で有名な土星は8倍位の双眼鏡で米粒のような細長い形ちに見え3cm、40倍位の望遠鏡で環である事がはっきりと見えるが本当の面白さは15cmに200倍以上かけないと味わえない。此の位になると環のカッシニの空隙が真黒く見え本体の帯も見えて見た来のある者以外には云

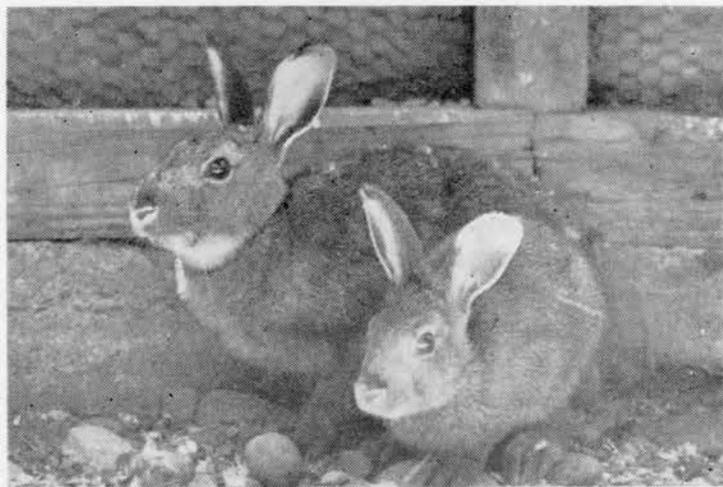
い表わせない美観を呈する。一般的に云える事は少しでも口径の大きな望遠鏡の方が倍率は同じでも良く見えると云う事である。此の点価格の安い反射の方が有利である。これは集光力と分解能の点からして当然の事であるが、一例をあげると5cm100倍の望遠鏡より7.5cm50倍の望遠鏡の方が像は小さいが細かいものまではるかに良く見えると云う事である。

大体口径1cmにつき10倍位が見良い所で15倍が位が限界となる。最後に月についてであるがこれは口径に応じてそれぞれ楽しく眺められる火口と云われる部分は2~3倍位の双眼鏡でも見える。注意する点は、満月の時はさける事である。正面から日光が当たっている為に凹凸がわかりにくく、案外つまらないものである。もう一つ是非簡単なもので良いから月面図を持つ事である地図無しではすぐに飽てしまう。月ばかりでなくどの天体でも面白いものがあつたらスケッチして時間と使用機械を記入しておく楽しくもあり又何か役に立つものである。

(大町北高校教諭)

## 動物園日記

### ノウサギ



ノウサギ親(左)と子

動物園でノウサギを飼育している所は少ないと思う。私たちの館は幸い山に近いので割合簡単にノウサギが手に入る。しかしエ付かせる事がひと苦労であり、チョットした事で死んでしまうので管理が又大変である。本館ではエサとして与えているリンゴの消毒液で全滅した事もあり、梅雨時に多く落命している。

そして今迄飼育舎内で繁殖したのは1例のみ。それも

2, 3日で死んでしまった。

今年に入って、昨年仔飼いにしていたのが7月3日ヒヨッコリ2頭の可愛い子を産んだ

早速外部との接しよくを最少限に食いとどめようとアミの周囲にムシロを張った。

育ててくれれば良いかと注意して今日(10月20日)ま

で飼って一頭は落命したが一頭はご覧のように天きくなった。そろそろ別の飼育舎に移してやらねばならないのだが、移す所がなく頭が痛い。今もノウサギとリス、ホンシウモモンガーが同居しているような有様である。「運動しようにも、この狭くっちゃね、その上、しょっちゅう変なのが現われてさ、早いとこなんとかしてくれよ」と云わんばかりの顔付、飼育舎の新設はおろか旧舎が傾きかかって修理の費用もない状態、ましてや保護舎など建てられそうにない。だから親切な市民が動物を持ち込んで来ても見殺しにしてしまわなければならない。

他の動物園で大切に飼育して下さる所があればノウサギの子供を近づけてやりたい位である。同居人の何人も居る狭い飼育舎でみすみす殺したくはないからである。(千葉柊司)

お願い 社会教育予算は毎年削減されつつあります。「山と博物館」の予算も例にもれませんが読者の皆様にはご迷惑をおかけいたし申し訳ありませんが次号(11月号)は勝手ながら休刊させていただきます。 大町山岳博物館

## 南アルプス植物雑感

中村武久

## (2) 南アを代表する植物は

方々の山を歩いておもうことに、一つとして同じ印象の山はない、それはその山の景観にあることはいうまでもないが、殊に私のように植物に興味を持つものには、その山容よりむしろ身近かに接する植物からその山の印象を深くする場合がしばしばある。例えば北アルプスの白馬岳へ登ると猿倉辺のブナの林や、馬尻のオオイタドリの群落をみて、これから白馬に登るという気持ちになり、そして頂上周辺に広がるウルップソウやツクモグサの群落等々、こうしたものが白馬の印象として今日をつぶしてもはっきりと脳裏に浮んでくる、こうしたことは植物の豊富な白馬のみならず、他の山でも必ずといってよいくらいあるもので甚だ興味深いものと思っている。

南アルプスでも例外なく、それぞれの山に特有な植物があり、また印象の深い植物の群落があって毎年夏には私の目を満足させてくれる。例えば北岳をツリ尾根から八本歯あたりまで登ると険しい断崖岩隙に群をなして大きな花をほころばせるタカネピランジや、緑白の葉の上に白いかれんな花を並べるシコタンハコベを眺めて始めて北岳近しの気分が湧いてくる、そして肩の辺から北岳小屋への下りの裸地に小群をつかって点在するキンロバイをみ、また頂上周辺の草叢にキタダケソウやハハコヨモギ、タカネマンテマをみるに及んではよいよ北岳の印象を深くする。この他仙丈岳ではタカネゲンナイフウロやクロユリの群落、そして頂上カールの中のミヤマヒカゲノカズラやヒメハナワラビは私にとって仙丈岳の忘れられぬ印象だ。なおまた北荒川岳のオノエリンドウとシロバナオノエリンドウの混群、赤石岳大聖寺平のコバノゴメグサ等々その印象は枚挙にいとまない。

このように今頃の中にその山の印象として浮んでくるこれらの植物が、果して南アルプスを代表するものなのかどうか、但し代表ということはその意味が二つあり、一つは南アルプスでなければみられないという固有な種類、これを代表とするか。もう一つは南ア以外の地でもときにみられるものであるが、特にこの山域において量も多く高山帯のいわゆる御花畑に見事な群落となり、何かそこに南ア特有な景観をかもし出しているもの、これを代表とするか、その辺の論議はなかなかむづかしい。

前者は多少学術的価値ということがひっかかってくるが、その両者を含めてどんなものがあるか拾ってみよう手近かなところで小泉秀雄原著横内齊氏の補正した「南



タカネピランジ

アルプス寒地植物誌」によると、南アルプス固有なものとしてタカネコンギク、センジョウアザミ、アカイシコウゾリナ、キタダケヨモギ、サンプクリンドウなど40数種を上げており、その中には全くその分布が極部に限られ、またその種類としての特徴も明瞭かつ安定したものも少なくない、例えばキタダケソウやサンプクリンドウなどはその例で、ことにキタダケソウなどは北岳以外の産を知られていない稀産品、珍品である。こうした学術的価値の高い珍稀なものを南アの代表とするのは少々無理を感じる。そうすると、この固有なもので南アを代表するものは何かということになるが、比較的全域に分布し少なくとも亜高山帯以上にみられるものでなければ具合が悪いことになる。この観点から固有種を拾ってみるとその数は極めて少なく、タカネコンギク、ハウオウシャジン、タカネマンテマ、タカネピランジ(オオピランジも含む)など数種を上げるのみだ。さてこの中からもしこの部類の代表をえらぶとするなら……、私は先きにも書いたように高山帯の断崖岩隙に可麗な花を並べているタカネピランジをまずえらびたい、これは北の駒ヶ岳を除いて、仙丈岳、北岳、塩見岳、東岳等南アの主峰とみられる各山岳に量こそ少ないが必ずあって、登ってくる人々の目をひきつけていること間違いない、これこそ南アの代表種としてよいものだろう。

一方量の面からみた場合はどうだろうか、いうまでもなくハイマツが多いことは北アのそれと変りがない、それだけにこれを量の上の代表とするには甚だ不適当で、やはり他に多少は産することが知られていても、南アならではの忘れぬ特別なものでなくてはなるまい、この観点からすると高山帯に比較的御花畑の少ないこの山域で

何が最も多いかはとても決められるものではないが、全域にわたり多く、また南ア的香りの強いものとしてタテヤマキンバイ、コパノコゴメグサ、シコタンハコベ、ヤマハジゴタイ(タカネヒゴタイ?)などが上げられるがなかでもどれとは決めかねる。

その意味からも私は高山帯のものでは先きのタカネビランジを代表とするだけで充分と思っているが、ただ亜高山帯のシラビソ、コメツガなどの林下にまで栽培したものであるかの如く一面に広がるセリバシオガマの群落をみて、これこそ南アルプスを感じさせる非常に重要

な要素ではないかと思っている。先年富士山の西側にある毛無山を歩いた折、林下にこの種の群生するをみて、何か南ア山中を歩いておるかの錯覚を起したくらいである。南アのどこの山でもその中腹の針葉樹下に、細かに切られた葉を並べ、みごとに群がる様は、南アに登る人々の誰しものが目にし親しんでいるものと思う。残念ながら樹陰に育つ地味な植物だけに高山帯のものに比べてその印象が少ないことに多少の欠点はあるが。

【山博学芸員・東京農大第一高校教諭】

## 長野県 安曇地方の民話 (その一)

### 七導の面 青木 治

白馬村北城区切久保のお宮の祭礼はこの付近で有名なお祭の一つに数えられている。昔はお祭は旧の七月七日だったので七導(しちどう)の祭といっている。このお宮には三個の宝物の面がある。この天狗や鬼の面に装束をかためた者が祭りの日の行列に加わる。これを風流(ふりよう)という。又笛や太鼓の一隊や尾花踊の稚子やお饅頭の行列も加わり、塩島を出発新田で休憩し切久保の神社まで練って行く。切久保へ着くと拜殿へ尾花や饅頭を供え神主の拝礼につづいて、七導の面者が神主の先導で拜殿下の石段を上下する。(天孫降臨のように見える)又二組に分れた稚子達は金銀紙を貼った脚絆に赤い襦袢の縫下げに袴掛けで、手に手に尾花を持ち太夫の音頭に合せて踊る尾花踊もなごやかである。七導の面について次の様な話がある。

切久保のある家で嫁をもらった、その名をおかるといふ、最初の中は一家も睦まじかった。その中馳れるに従って嫁のおかるとは姑を邪魔者にしだした。姑の方でも家の嫁はけしからんと、些細のことでも数へ挙げて嫁をいじめた。角突合の劇しさは口さがない近隣の話に上った。或る晩のこと嫁は日頃の鬱憤を晴らしてやろうと、切久保の氏神様の宝物殿に忍び込み、宝物の鬼の面一つを持出し、これを被って、ひそかに姑の寝室に来て障子の破れ目から姑を呼び起し、「日頃おまへは嫁のおかるとを苛めるから今夜は俺が代って、その怨を晴してやるぞ」とおどした。姑は驚いて見ると恐ろしい鬼が障子の穴からにらんでいる、びっくりそのままその場にころんで気絶してしまった。おかるとは計画の図に当たったのを喜んで一先づお宮に帰り、早速面を取って元の場所に戻そうとしたが、如何にしたものか、面はびったり顔にくっついて、いくらもがいても取れない、そうしている中に夜は明方に近づく、申訳け無さとざんきの念とで胸もかき乱れ思案に余って、そこを飛び出し楠川岸の岩窟へ



その身を隠してしまった。家人も夜中の物音に驚いて目を覚すと姑は気絶しているし、嫁は見えない。早速手当をして姑を蘇生させた。その後色々せんざくしたが、おかるとの行方が判らない、これはつまり嫁の仕業に相違ないということになった。それ以来切久保のお宮では鬼の面が一箇不足したので新調した。そのおかるとの隠れた岩窟は松川上流の倉下の穴へ抜けているという。その倉下には小さな祠が十二あり境内には大樹があったが、後に切倒された。又この話は一説によると鬼の面を被ったおかるとは白馬岳の一つ杓子岳へ上った。そこで七月七日のお祭には面が一つ不足するのでおかるとが下りて来て加わるという。かような悲しい話があるので七導の祭の日には必ず三粒でも雨が降るといふ。(大町高校教諭)

## 内に秘めた情熱の人たち

## 私は思う

東京教育大学 教育学部 教育学科 比較教育学

渡 部 隆

大町山岳博物館が、青年たちの力を母体としてつくられたものであることに私は強くひかれる。当時の青年たちの若々しく、そしてがむしゃらな情熱は、今もなお山博の中に生きてるように思う。

山博が直面している問題の一つに財政上の問題がある。本年度に於ては予算の85%が人件費と維持管理費で、学芸活動費は15%にすぎない。しかも、この15%金額にして49万円であるが、このうちの20万円は、雑誌「山と博物館」の費用となっている。従って文字通りの活動費は29万円ですべてなされなければならないことになる。山博の学芸員が多忙すぎることを、このために学芸員本来の仕事である研究と教育普及活動に専念できないことも、この財政上の問題に直接につらなっている。観光開発と山博活動の一体化をどうするか、これも大きな問題である。世間一般には事業色の濃厚すぎる観光のための観光としてぎょうぎょうしくさわざたてている観光地が多すぎるようである。恐らく人々は、こうしたものには、しだいに満足できなくなるだろう。現に青年層には、これを不満とする声が高まりつつあるように思われる。大町市の観光開発にあつては、ただ単に山博名を利用した形式的な一体化であつてはならない。観光と山博の一体化は、各々の性格が異なるため現実には山博の美名を利用したにすぎない様なものとなる危険性が多分にある。そうであつてはならない。そして観光と山博が真の意味での一体化となつたときこそ山博は世界的なものとなると考える。めぐまれ自然環境を生かして経済的にだけ、知的教養面においても秀でた文化都市となつて山博の目標を達成するだろうと思う。

ひとつひとつに対してすぐには反応しないが、時間がたつてから示す反応のたしかなさ、重々しさ。創立期に於て、町議会議に隊を組んで出席し、博物館創立運動に反対をとなえる議員に「そうじゃねえ、そうじゃねえ」といっせいに集中攻撃をした青年たちのもつていたあの熱情を今でも心に秘めている人。これが、この山博の学芸員の人たちについての私の感じたことであつた。鶴田総一郎先生の指導のもとに、私たち10名の学生は、10月15日から19日までの博物館学実習を学芸員の人たちと一諸に学んだ。私の得たものは、人間の善意——地位にとらわれず一心に真剣に生きる人間の存在についてであつた。

## 芝生の上で 東京教育大文学部3 助 弘 倫 子

山とも云えぬ丘とも云えぬ、なだらかな芝生の上に腰をおろし、民家よりほのほのとたちのぼる煙の行方を眺めてみると、言葉は自ら歌になる。アルプスの山はかすみで大町を いただくが如く まもるが如く一日中でも飽き足らぬ。同じ場所で一週間眺めていても飽く事はない。不思議な世界である。

しばし、背中をクルリとまわし、山に向つて俯せになれば、紅葉の間に、クリーム化粧をし、エンジにまぶたを縁どつたエレガントな山岳博物館が我が身に迫り来る。耳を澄ますと、博物館の中から、絶え間なく騒音がきこえてくる。期待はずれの博物館、矛盾だらけの博物館、それらをあやつる大きな糸。その糸がいつしか、からみ合い、何かと何かがまじり合い、円滑にまわらない車の音かもしれない。

しかし、山の中に生れ、山の中に育ちつゝある博物館は、何かしら未来の夢に胸をふくらませ、清純な目がきらきらと輝いている様な気がする。なのに市民はどうして幸せを感じとる事が出来ないのかしら……。日々を齟齬過すことだけが、人間の生きる術なのだろうか……。自然に帰る、自然に生き、自然の美を感じとることによって、そこから、又、新たな生命が湧き出ることを、どうして考えないのだろうか。人間の世界にも、又、不思議な世界があるものだ。

10月19日記

## 博物館だより

9月30～10月5日 北アルプス植生調査 (平林国男)  
10月15～19日 東京教育大博物館実習 (本館)  
10月18日～11月6日 木曾街道六十二次浮世絵展 大人  
20円 子供10円 朝8.30～夕5時まで。  
同時展示 郷土民芸新作々ズクナシ人形々 既売会100円  
より200円まで 照合は本館まで。

山と博物館 第7巻第10号 1962年10月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館印刷所 大町市上仲町  
信州印刷大町工場